

小学校1学年における絵本を用いた読書指導の可能性

— 国語科と図画工作科との関連を図った指導を中心に —

細 恵子¹

要約

保幼小の円滑な接続が求められる現在、小学校1学年においては、幼児期に行われてきた読み聞かせを引き継ぎながら、児童が絵本の読み方を習得し、楽しみながら読む力を身に付けることができるように指導を行っていく必要がある。本研究では、絵本の文章だけでなく、絵を丁寧に読むことで絵本を深く読むことができると捉え、絵を読むことに関する絵本研究を基に、まず絵本の絵を読むことの意義と、絵を読むことで目指す力について考察した。次に、絵本研究から、絵に注目するために必要な絵の構成要素とページ構成を抽出した。さらに、それらを用いて絵本『はなのみち』の教材研究を行い、文と共に絵を読む方法を取り入れた読み聞かせの指導により、どのような読み方を身に付けることが可能であるか、絵本が教材としてどのような意義をもつかについて考察し、国語科と図画工作科との合科的・関連的な読書指導の可能性を示した。

キーワード：絵本研究、絵、文章、読み聞かせ、要素

1. はじめに

『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（平成29年告示）の領域「言葉」（3歳以上児）では、絵本に直接かかわる内容として「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」が挙げられている（幼稚園p.20, 保育所p.48, 認定こども園p.86）。保育所や幼稚園などでは、この内容を指導するために日常的に絵本の読み聞かせが行われている。子どもたちは、大人が行う読み聞かせを聞きながら、絵を見て楽しんでいる。幼児期の読み聞かせで使われる絵本は、文章を読み取る力を付けるためのものではなく、先生や友達と共に楽しみ、想像を膨らませるためのものである。

小学校に入学した当初の国語科では、幼児期での絵を見る活動に引き続いて、絵を見て気付いたことや想像したことを話す学習が始まり、次第に絵を手掛かりとして文を読む学習へと移行する。『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』（以下、『解説国語編』とする）では、第1学年及び第2学年「読むこと」の内容の一つとして「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。」が挙げられ（p.69）、「着目した場面の様子などの叙述を基に、主人公などの登場人物について、何をしたのか、どのような表情・口調・様子だったのかなどを具体的にイメージしたり、行動の理由を想像したりすること」と説明されている（p.72）。読む力を身に付けさせるために例示されている言

¹ 千里金蘭大学

語活動の一つには、読み聞かせをしてもらったことを基に、内容や感想を伝え合う言語活動が挙げられている (p.74)。1学年は平仮名の読み書きの練習をし、文章を読むことが少しずつできるようになる段階であるため、幼児期と同様に読み聞かせを楽しみながら絵を手がかりとすることで、文章の内容を理解したり場面・人物の様子や人物の気持ちを想像したりすることが容易になる。入門期の児童にとって読み聞かせは、保育所や幼稚園との円滑な接続を図るために重要なものである。

小学校での読み聞かせは、国語科以外の時間、例えば、朝読書の時間でも行われる。しかし、読み聞かせは、幼児期と同様に、本に親しむという目的のもとに行われることが多いのではないだろうか。保幼小の円滑な接続のためにはもちろんこの目的で読み聞かせをする必要がある。しかし、国語科では、次第に一人で本を選び、文章を読んで感想をもつ力を育成していかなければならないため、これまでに行われてきた読み聞かせに新たな目的と学びの活動を加えたいと考える。

文章と絵から構成されている絵本では、絵も重要な働きをしており、読者にメッセージを与えてくれる。文章と同様に、絵の中で何がどのように表されているかを丁寧に読んでいくことにより、場面・人物の様子、人物の気持ちなどを想像することができる。文章が語っていないことでも絵が語り、想像を膨らませることができる。また、子どもたちは、絵の中でいろいろな形や色などに出会い、場面の雰囲気を感じ取り、印象を表す言葉も獲得していく。絵を読むことの意義は、文章と関連させながら想像を膨らませることはもちろんのこと、文章だけでは分からない作品世界の雰囲気やメッセージを読み取り、文章を読むことに力を与えることであると考える。

本研究の目的は、①これまで行われてきた絵本研究を基に、絵本の絵を読むことの意義や絵を読むことで目指す力について考察すること、②絵に注目するための諸要素を使い、小学校1年生に読み聞かせる絵本の教材研究をすることにより絵本の読み方の可能性について考察し、絵本の教材としての意義、教科間の関連を図った読書指導の可能性を示すことである。

研究方法としては、まず、芸術作品として絵の分析を行う絵本研究と、読書指導や国語教育との関連で考察する絵本研究を基に、絵本の絵を読むことにどのような意義があるのかを考察する。そして、国語科と図画工作科の目標に照らし合わせながら、絵を読むことで目指す力（国語科としての力、図画工作科としての力）を示す。次に絵本研究から、絵を読むための諸要素を抽出し、それらを使いながら絵本『はなのみち』の教材研究をする。この本を選んだ理由は、文と絵の関連付けが容易であり、絵だけのページでは諸要素に着目することで、文が語っていないことを読み取ることが可能であると考えられるからである。絵の中に自然や友達が描かれたこの絵本は、1年生の児童が自分と関連付けながら親しみをもって絵の基本的な読み方を学ぶのに適していると考えられる。これまでの筆者の読み聞かせの経験からもこの絵本は児童にとって驚きや感動のあるものであった。本研究では、国語科光村図書の5月教材「はなのみち」の原典を取り上げるが、その学習のねらいは、絵を手がかりとしながら文を読む教科書教材とは異なるため、同じ単元内で用いることは考えない。文章とともに絵の読み方を学ぶことをねらいとする読書指導として、国語科の読書単元で行うことを考えたい。教材研究では、言葉・文と絵との関連付けや絵の着目のさせ方とそれによって身に付くことが可能な力を示す。

2. 絵本研究の考察

2.1. 芸術としての絵を読み解く絵本研究

絵本の絵を芸術として読み解くことを行った絵本研究としては、ジェーン・ドゥーナン（1993）、藤本（1999, 2001, 2007, 2015, 2018）を挙げることができる。

ジェーン・ドゥーナン（1993）の著書『Looking at Pictures in Picture Books』は、正置・灰島・川端訳（2013）により訳本となっている。本研究では、以下、この訳本からジェーン・ドゥーナンの絵本研究を考察する。ジェーン・ドゥーナンは、絵本を美術鑑賞の入門として貴重なものと考え、絵画の基本的な要素やそれらの組み合わせによる構成に着目して、絵に込められた深い意味を読み解く方法を示している。また、教室で12歳～14歳の生徒に対して行った「絵本を学ぶ授業」も紹介している。例えば、絵本の絵の線の質をどう言い表すとよいのか、配色が絵全体の印象をどのように変えるか、色は何を象徴しているか等について言葉に出す活動、絵本のことばや文章から絵のどこを見ればよいのかを考える活動、絵本の諸要素を意識しながら言葉が語るものと絵が語るものの間にはどんな関係があるのかなどについて絵の要素の用語を使ってレポートを書く活動を取り入れている。ジェーン・ドゥーナンは、子どもが絵本の絵の感想をもつ時、「なぜそう思ったか」を言葉で説明するためには、絵の読み方を知っていることが必要であるとし、描かれたものの意味が分かることは、「美術館の絵画に親しみ、感動したり楽しんだりする能力」と結びつく述べている（p.74）。

藤本は、絵本を連続した絵として捉え、登場者の進行方向、色や線、点、視点、構図等の要素に着目し、それらの用語を使って絵の雰囲気や人物の様子、気持ち、テーマ等を具体的に楽しく読み取る方法を紹介している。藤本（2001）は、文章（テキスト）と絵（イラストレーション）の関係について、「絵本はテキストとイラストレーションが互いに協力し、補い合って内容を伝える芸術表現であり、また両者は、ときには競い合って作品を形成していきます。また、絵本では、テキストにしか語れないことがらがあり、逆にイラストレーションによってしか示せないことがらがあります。テキストもイラストレーションもそれぞれ独自の役割をはたしますが、表現不可能なところを互いが補うこともあるということです。」と述べている（pp.104-105）。藤本（2001）は、子どもが文章と絵によって育つとし、絵本で身に付けさせたい力として、「すばらしいものを選んで味わう鑑賞力、生きていくに大切なものは何かを判断する力、ものを豊かに自由に想像する力」（p.18）を挙げている。

ジェーン・ドゥーナンと藤本は、芸術として絵を捉えて絵の分析をしているが、ジェーン・ドゥーナンは、絵画の専門的な要素を多数用いており、美術の鑑賞力を高めることを目的としている。一方、藤本の目的は、子どもたちが絵本の仕組みや絵の見方を知りもっと楽しく絵本を読むことができるようになることである。

2.2. 読書指導や国語教育との関連で考察している絵本研究

絵本の絵を読むことを読書指導や国語教育との関連で考察している研究としては、米谷（2005）、三森（2002）、余郷（2013）、奥泉・内海・岡田（2004）が挙げられる。

読書指導との関連で絵本研究を行ったのは、米谷（2005）である。児童の読書感想文コンクールの入選作品から、絵を読んだ感想文を取り上げ、絵本の絵の読みがどのようなものであるかを分析した。その結果をふまえ、小学校下学年で絵を読む場合は、「観点を決めて絵の感想を出しあい、話し合っ

いくという方法をとっていくべきである。」と述べている (p.169)。米谷は、小学校1年生に対して、読書活動集会で読書指導として「絵本の比較」の指導を行っている。これは児童が絵本の絵を楽しんで読むこと、児童の感性を育てることをねらった指導である。例えば、1年生には、『おおきなかぶ』の絵本3冊から2冊を選ばせ、登場人物の様子や服装などの同じところと違うところを見付けさせている。高学年の指導では、2冊の絵本でほぼ同じ場面が絵になっているものを3つの観点「人物や物の描き方の違い」、「色使いの違い」、「場面の受ける感じの違い」を用いて比較させている。米谷が使った観点は、藤本とジェーン・ドゥーナンが用いた要素にあたるものであると考えられる。

三森 (2002) は、ドイツでの体験を基に、絵本を読むためには「絵の分析」と「テキストの分析と解釈・批判」を使いこなせる技術が必要であると述べている (p.18)。三森は、つくば言語技術教育研究所の教室の子どもたちの様子から、絵を分析する力が身に付くことで、テキストを分析する力も身につくと実感し、テキストを一人で読む指標を参考にして絵の分析の指標を次のように設定している。

〈指標〉テーマ (主題), 設定 (場所・季節・天気・時間・時代背景), 人物 (描かれている物・人物等の考え・感情・会話など), 象徴, 色調・色彩, タッチ, 構造 (p.23)

三森が行った実践では、絵本に合った指標について子どもに「どうしてそう思うか」と質問し、絵から得る印象とその理由を言語化させている。この方法はジェーン・ドゥーナンの方法と似ている。

余郷 (2013) は、主人公の立ち位置の変化によって「絵本のメッセージを受け止めることができる」(p.13)、色彩によって「人間社会のあり方を伝えている」(p.19)と述べている。また、絵本モニタージュ (一枚の絵画を見るだけでは得られないイメージや心理的効果を、複数の絵画を組み合わせることで聞き手に得させる仕掛け) (p.24)によって「主人公の心理を強く・深く体験することが可能」(p.25)と解説している。「バムケロシリーズ」の絵本では、「語られることのない絵の物語を見つけ出し、絵と絵とを関連づけ、自分で物語をつけて語り出すことによって、情報処理・発信能力が形成される」と述べている (p.68)。この能力は、高度な情報社会の中で生きていくために必要な力であるとされている。

奥泉・内海・岡田 (2004) は、絵の分析能力を「情報分析力の一部」(p.33)と捉えている。実践方法としては、書かれている言葉や表現に基づき、観点 (題名, 設定, 話者, 登場人物, クライマックス, 対比 (色や大きさ等), 主役と対役, 象徴, 主題, 題材) から読み取る「分析批評」を用いた美術の授業実践 (絵の分析) が有効であることを紹介し、国語教育における映像教材の読み解きにおいても「分析批評」が導入されることを求めている。さらに、小学校の国語教科書の絵や写真を①表現されている対象, ②対象の何を見ることによって, ③どのような言語表現をさせようとしているのか, によって分類し、国語科で目指す、絵や写真を「読み解く力」、またそれと関連させた言葉の力を次のように示している。

ア：絵や写真からわかることを正確に「読み解く力」(だれが何をしているか, 何はどのような形状か, だれはどこにいるか等)

イ：絵や写真をきっかけとして, 自分の経験や知っていることを述べる力

ウ：絵や写真を比較する力

エ：絵や写真から想像してお話等を作る力

- オ：絵や写真ではわからない情報を、聞いたり調べたりして補う力
- カ：複数の絵や写真の関係を検討して、つなげて説明やお話を作る力
- キ：絵や写真に込められた象徴性やメッセージ性などをことばにしてみる力
- ク：絵や図、写真の効果を考えて情報を発信する力（pp.41-42）

奥泉・内海・岡田の分類によると、1年生の教科書の挿絵においては、様子や動作、表情、服装、持ち物に着目し、「だれが何をしているか」、「何はどのような様子をしているか」、「だれとだれは何を話しているか」、「見て気づいたことや知っていること、経験などを言う」という型で表現させるようになっていると示している（pp.39-40）。つまり、上記のオとイにあたる。これらの力は、小学校国語科教科書では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域で育成する力である。

2.3. 絵本の絵を読むことの意義

上記の絵本研究から絵本の絵を読むことの意義について考察する。

① 感想を広げ、論理的に話したり書いたりする力の育成

ジェーン・ドゥーナンや三森は、子どもたちが絵の分析をする際、要素や指標を使いながら「なぜそう思ったか」を問い、言語化させている。絵本の絵を見る時、子どもたちは「きれい」「すごい」「かわいい」などの感想を言葉にするが、『小学校学習指導要領』の図画工作科で示されている「自分の感覚や行為を通して、形や色などに気付くこと。」「形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。」に関連させると、絵の中のどこがどのようなになっているからそのような感想をもったのかを話させることができると考える。絵の要素に着目すると、今まで気付かなかった視点で感想をもつことができ、絵の中の根拠に基づき理由をつけて感想を話したり書いたりする力の育成につながっていくだろう。

② 豊かな想像力と解釈する力の育成

藤本（2007）は、文章の行間を読むことの他に、絵を見て、文章には書かれていない情報を読み取ることや、逆に、絵では示せないものを文章から読み取ることの事例を示している（pp.21-29）。文章が語ること、語らないことを捉えながら絵が語ることを読み取っていくことで、絵本の読み方を学ぶことができるとともに場面の様子や人物の気持ちを豊かに想像することができると考えられる。絵の要素に着目しながらページを行き来したり絵と絵を比較したりすることで、言葉には表しにくい象徴されたものの意味やテーマを捉えたりすることもできると考える。これらは解釈する力へとつながるだろう。特に、絵の要素の中の色に着目して絵を読むことは、児童に色のイメージをもたせ、そこから場面の雰囲気や人物の気持ち、性格などを読み取らせることができるので重要である。絵の色に着目して読む力は、ファンタジーや色彩表現、情景描写のある物語において、色を表す言葉から情景や心情を想像したり色のもつ意味を解釈したりする力へつながっていくと期待される。

③ 文章を読み、論理的に表現する力の育成

三森（2002）は、自分の実践経験から、指標を使って絵の分析をするとテキストも同様に指標に従い、内容を深く読み取ることができていることを明らかにしている。また、「なぜ？」と問いかけ、絵の中にその答えの根拠を見付ける作業を繰り返すうちに、テキストに書かれた事実を根拠にして表現することができるようになることも明らかにしている。絵を読むことは、文章を読む力、言葉や文を基に理由を明確にして自分の考えを書いたり話したりする論理的な表現力の育成につながるという意義がある

と考えられる。

3. 絵本の絵を読むことで目指す力

絵の要素に着目して絵を読み、言語化する学習を教科の目標と照らし合わせると、国語科と図画工作科の両方の目標をもつことができる。そのため、本研究では、絵を読むことを取り入れた絵本指導を合科的・関連的な指導として捉えた上で、国語科と図画工作科で目指す力を明確にする。

3.1. 国語科としての力

現在の『解説国語編』「読むこと」では、「挿絵なども手掛かりに」という表現はあるが、絵そのものを読み取ることに関する力については明記されていない。本研究では、絵を読むことに関する先行研究を基に、小学校1学年の国語科として、絵を読むことで目指す力を以下のように考える。() は、国語科の領域を示す。

- ・絵だけのページで、絵から気付いたことや想像したことを話したり書いたりする力。文章に書かれていないことで絵から読み取れるものを探し、場面の雰囲気等について話したり書いたりする力。絵と絵を比較し、違いを見付けて話したり書いたりする力。(話すこと・聞くこと、書くこと)
- ・文章と共に絵から好きな場面を見付け、感想を広げる力。根拠を文や絵から選び、絵の要素の用語を使いながら理由を付けて好きな場面について話したり書いたりする力。(読むこと)
- ・文章と絵を関連付けて、絵の要素に着目しながら場面・人物の様子や人物の気持ちを具体的に想像する力。(読むこと)
- ・前後の文章とも関連付け、絵と絵を要素で比較し、場面・登場人物の様子や登場人物の気持ちの変化を捉え、その理由を解釈したり、大事なことを読み取ったりする力。(読むこと)

3.2. 図画工作科としての力

図画工作科の教科書「ちいさなびじゅつかん」(開隆堂出版pp.2-4)では、エリック・カールの絵本『ちいさいタネ』やいわさきちひろの絵本『ことりのくるひ』の絵が取り上げられている。教科書では、みんなで話し合いながら形や色の面白さに気付かせること、次の表現活動(形や色を考えて表現する)への意欲をもたせることをねらっている。図画工作科の鑑賞では、形や色などに関わり感性を育むことを目標とし、造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて感じ取ったり考えたりして見方や感じ方を広げることができる力を育成するよう指導している。絵本の中で形や色に着目して絵を読むことにおいても図画工作科の目標に沿って指導することができると思う。

3.3. 読書指導としての力

本研究では、国語科としての力、図画工作科としての力を目指しながら読み聞かせによる読書指導を行っていくことを考える。国語科と図画工作科との関連を図った読書指導としての力を次のように整理する(下線部は筆者による)。

表1 図画工作科と国語科との関連

図画工作科	国語科
○形や色などの絵の要素に着目して絵を見て、芸術作品の面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて感じ取ったり考えたりする。(感性、絵を鑑賞する力)	○絵の中の要素を根拠として、人物や物の描かれ方や場面の雰囲気等についての感想とその理由を話す。(感想を広げ、論理的に話す力) ○絵だけのページの場合、前後の言葉や文・文章と関連付けながら、絵の中の要素を根拠として、場面・人物の様子や人物の気持ち等を具体的に想像して話す。(豊かな想像力) ○絵の中の要素を根拠として、言葉や文・文章と関連付けながら、絵と絵を比較し、違いや変化とその理由、大事なことを読み取る。(解釈する力)

表1に示すように、図画工作科では、絵の要素に着目して感性や絵を鑑賞する力を育てることを目的とする。国語科では、絵の要素を根拠として、感想を広げ、豊かな想像力や論理的に話す力、解釈する力を育てることを目的とする。

4. 絵を読む方法を取り入れた読み聞かせ

幼児期に絵を見ながら読み聞かせをしてもらってきたこと、まだ文章をすらすらと読むことができにくい児童がいることを踏まえ、1年生の読書指導にも、絵をじっくりと見ながら話を聞くことのできる読み聞かせを位置付けたい。

読み聞かせについて、余郷（2013）では、絵本の読み聞かせの4原則の中に「質問したり、感想を求めたりしない。読みっぱなしにする。」が挙げられている（p.55）。それとは異なり、三森（2002）は、子どもが絵の中に発見をしたり疑問を見付けたりするときに黙っていることができない実態を踏まえ、その心が動いたときに、大人が問いかけることによって子どもの力を引き出すことが必要だと考え、絵の分析に基づく読み聞かせを実践している。米谷（2005）も大人が問いかけることに賛成であり、「特に絵を読むことの指導については、それだけを取り立てて学習するような場を設定していくべきである。(中略) 物語の途中であっても教師が質問するような形で絵のよさについて児童に話させたうえで、必要に応じて要領よく短く教師が説明するというようにすべきである。」と述べている（p.300）。筆者も小学校教員として読書指導を行った経験から、児童に身に付けさせたい力は指導者の働きかけで伸びていくことが多いため、三森や米谷の考えのように、読み聞かせの中で子どもの反応を見ながら問いかけることは重要であると考えられる。

児童が絵をじっくりと見て反応するためには、自分のペースで次のページをめくったり前に戻ったりすることが必要であるため、本来であれば児童の一人一人に本を用意すべきである。しかし、本研究では絵本の絵の読み方の初めての指導を想定するため、学級での読み聞かせを通して児童同士が感じたことや考えたことを交流しながら学ぶことができるような指導を考える。読み聞かせの中では次のように指導することが考えられる。

- ・読み聞かせをする時は、1ページずつ絵をゆっくりと見せ、考えさせたいことについては前後のページを比較したり、前に戻ったりすることができるようにする。
- ・指導者は、子どもの反応（つぶやき、表情）を生かしながら、絵本の特徴と付けたい力に応じて、絵の印象や場面の様子、人物の気持ちなどを意図的に問い、絵の要素に着目させ、豊かに想像したり理由を明確にして感想を話したりすることができるように導いていく。

5. 絵を読むための諸要素と方法

指導者は、読み聞かせをする時、児童に漠然と絵を見させるのではなく、絵の特徴を生かし、ねらいをもって言葉と絵を読む力を身に付けさせる必要がある。そのためには、まず指導者が絵のどこをどのように見ればよいかという絵の読み方を習得しなければならない。

本研究では、藤本の諸要素と分析方法を援用する。その理由は次の通りである。

- ・藤本が用いている諸要素は、1枚の絵を独立させて分析するのではなく、絵本を連続したものとして前後のページとの関係で分析するために使われている。絵本を連続したものとして分析する方法はめくるという絵本の特徴に合う方法であり、絵本の読み方を学ぶことができるからである。
- ・藤本は、絵本を楽しく読むために絵を読むことに力を入れ、言葉と絵の関係を捉えようとしており、美術教育に偏っていないからである。
- ・藤本は、すばらしいものを選んで味わう鑑賞力とものを豊かに自由に想像する力、生きていくのに大切なものは何かを判断する力を培うことを目指して絵の分析をしている。これらの力は、図画工作科で求められる感性、鑑賞力、国語科で求められる読む力、『小学校学習指導要領』で求められる「学びに向かう力・人間性等」と関連があり、国語科と図画工作科との合科的・関連的な読書指導が期待できるからである。

本研究では、絵を読む際に着目するものを具体化するため、藤本の絵本研究から絵を分析する要素を抽出し、絵の細かい所に着目するものとして「絵の構成要素」、絵と絵を比較したり、文章と絵を関連付けたりするもの、絵本の外側のデザインの機能、絵の配置等のページの機能として「ページ構成」に分類することとした。表2・3には、藤本が、絵本をどのような絵の構成要素とページ構成に着目し、どのような視点で分析したかを示している。

表2 絵本研究をする際の絵の構成要素と分析する視点

構成要素	分析する視点
体・顔の向き	左から右へ進行する絵本の場合、登場人物の向きは右向き（プラス面）か、左向き（マイナス面）か。
ポーズ	人物がどのようなポーズをしていて、そこからどんな感じがするか。動と静の繰り返しがあるか。リズムが生まれているか。
位置	事物の位置（上下左右）はどのような意味合いを持つのか。ページをめくりたくなるか。上や下、中央に配置されているか。両者の関係はどちらが優位か。両者の心の距離は近いのか、遠いのか。
点	色や大きさ、位置によってどんな状態を表しているか。点で目の表情をどのように使い分けているか。点描写によって何が表現されているか。
線	どのような線（直線・曲線等）が描かれているか、その線はどのような感じか。どんな表情・感情を示しているか。線がリズムを生んでいるか。
枠・コマ	枠があるのとないのとではどんな違いが生じるのか。枠の大きさはどのように変化しているか。それは何を示しているか。枠の装飾は本文の内容に沿ったもので描かれているか。
色・色彩	どのような色（暖色系・寒色系）で描かれているか。何を感じさせるか。色彩の組み合わせはどうなっているか。彩度・明度を落とすことで何を示しているか。どのように色が変化しているか。イメージがどのように異なるか。
形・形態	どのような形（円形・四角形・三角形等）で描き分けをして、どんな気持ちや様子を感じるか。
裁ち切り	紙面からはみ出して描いているか。それによってどのような効果があるか。
傾き	歪み、ねじれているところからどんな感じを受けるか。
構図	構図が安定しているか（三角構図）、不安定か（曲線構図）。

小学校1学年における絵本を用いた読書指導の可能性

視点	下から見上げる構図か、上から見下ろす構図（鳥瞰図）か。
遠近法	奥にはどんな世界があるか。人物間の心の距離はどうなっているか。どんな感じにさせるか。
余白	何を描いているのか。
画材	何を使って描き、どのような効果がみられるか。
一見関係のないもの	関係のないように見えるものを描くことでどのような感じが伝わるか。それは何を表現しているか。どんな役割を果たしているか。
一点ずれたもの	平凡さ（日常）の中に何か一点ずれたものはないか。どんな世界を感じるか。

表3 絵本研究をする際のページ構成と分析する視点

ページ構成	分析する視点
対比	最初と最後のページを比べて異なるところは何か。 対照的な二つの場面をどのように描き分けているか。何を意味しているか。 伝えようとしていること（テーマ）は何か。
絵の流れ・進行方向（語りの方向）	左（右）から右（左）へ移動しているか。登場人物同士の関係はどうか。 右下から左上、右上から左下への動きの場合何を読み取らせようとしているのか。
左右のページの関係、描き分け	左右のページの関係、描き分けはどうなっているか。それぞれのページで何を示しているか。
見開き	片側ページか、見開きページか。見開きページにはどのような利点があるか。
文章と絵の関係	文章の様子を示す絵が存在していないのはなぜか。 文章で語れないものを絵がどのように示しているか。
表紙・裏表紙	表紙と裏表紙を開いたらどようになっているか。 表紙と裏表紙からどんなメッセージが読み取れるか。
扉、カバーと折り返し、見返し	どんな工夫をして読者を物語に誘っているか。どんな情報を伝えようとしているか。

表2と3から明らかのように藤本は、多様な構成要素とページ構成に着目し、視点をもって絵を分析している。また、表3のように絵本の外側（表紙と裏表紙、カバー）、見返し、扉等にも着目して分析している。

小学校で絵本の絵を読むことをどのように指導することが可能であるかを考察するために、藤本が絵の構成要素とページ構成に着目して絵本をどのように分析しているかを具体的に見ていく。

① 連続した絵として捉える

藤本（1999）は、絵本『おおきなかぶ』で、全体を通して構成要素（はみ出して描く裁ち切り）により、言葉や文からさらに想像を膨らませ、かぶの大きさ、登場人物の力強さや動きを感じさせること、構成要素（画材のコンテ）により、太い線が大きくうねり、重量感を与えることを読み取ることができることを紹介している。また、絵の構成要素「ポーズ」により、動と静が繰り返され、リズムが生まれるという、構成のすばらしさがあることも紹介している。このように連続した絵を複数の要素を使って読むことで絵本のよさを見出している。

② 離れたページの絵と絵を比較する

藤本（2001）は、絵本『すきですゴリラ』において、対照的に描かれた2つ（前半と後半）の食事の場面の絵を複数の構成要素で比較している。絵の構成要素として用いているのは、「色」「形」「遠近法」「視点の位置」「一見関係のないもの」である。藤本は、前半の絵と後半の絵では「色」が寒色と暖色、「形」が幾何学的な形と丸みを帯びた形というように対照的に描かれていることとそれらから場面の様子や人物の気持ちが読み取れることを解説している。また、2つの場面を「遠近法」や「視点の位置」

「一見関係のないもの」で比較することにより、人物同士の心の距離感の違いを読み取れるとしている。この絵本研究では、2つの離れた対照的な場面を比較することで作品のテーマを捉えやすくなることが示されている。

③ 絵が語っていること、文章が語っていることを読み取る

藤本(2007)は、絵本『リベックじいさんのなしの木』を取り上げ、文章では語れないものを絵が語っていることを説明している。例えば、文章には書かれていないが、版画で刷り出された淡い色調と薄い着色によりさわやかな秋晴れの様子が読み取れること、言葉は書かれていないが、物語の筋に直接関係のない生き物の絵を描きこむことでそれが見ている方向へ注目させる働きがあることを説明している。逆に、音や時間の経過、「平和」「真」「善」などの概念のように直接絵で表すことができないものは文章で表すとしている。そして、このような絵と文章の機能を捉えた上で絵と文章がどのような関係で情報を伝達しているかを分析している。

6. 絵本『はなのみち』の読み方の可能性

では、抽出した絵の構成要素とページ構成に着目するとともに、藤本の上記①～③の分析方法を援用し、『はなのみち』(岡信子・作、土田義晴・絵)の絵を文と関連付けながら教材研究をする。

図1(表紙)と図2(裏表紙)を広げると、どちらにも白い袋が描かれている。この2つの絵を並べて見ることで、登場人物のくまが白い袋をもつきっかけや白い袋によってこれから起こる出来事等について読んでみたい

という意欲をもたせることができる。大きく描かれたくまをポーズという要素で見ると、顔が少し上に向いているところや足を前に上げているところなどから気持ちを想像させることができ、どこへ行くのだろうという思いをもたせることができる。このように絵本の表紙と裏表紙を見ることは、絵と絵を関連付けて話を予想する力の育成へとつながる。見返し(図は省略)では、黄緑の背景に様々な種類の木々が白の線で描かれている。藤本(2007)が「見返しは、物語の雰囲気(ムード)を作り出したり、また舞台背景を表示したりと、意図的に作られます。」(p.183)と述べていることを踏まえると、『はなのみち』の見返しには森の世界に誘う効果があると考えられる。この見返しや秋の色付き始めた葉や木の実などが描かれている前扉(図は省略)では、「場所はどこか」「季節はいつか」と問うことで、物語に入る前の情報について考えさせることができる。

図3(本扉:見開き①)からは見開きページで構成されている。藤本(2007)では、「見開きページは、横長の広い景色を示したり、登場者の進む(動く)場面を展開したりするのに向いています。」と説明されている(pp.124-125)。また、絵本『こすずめのぼうけん』で「小鳥の小ささと自然(木)の大きさ、こすずめの小ささとほかの鳥の大きさなど、事物の大小の感覚、まわりの自然の広がりなども、横長の大きな紙面であるからこそ的確に描くことができる」(p.130)と説明されているように、図3の右



図1 表紙



図2 裏表紙

ページに大きくくまが小さく描かれ、見開きページにすることで自然の大きさを十分感じさせることができる。文は書かれていないが、枠がなく、左右、下が裁ち切りになっているところからも自然の大きさを、優しい色使いからは美しさを感じさせ、感性を育てることができる。ここでは、児童に感じたこと（印象）とその理由を話させたいところである。「なぜそう感じたのか」と問うことにより、見開きや裁ち切り、色などに着目させ、それを根拠にして印象の理由を言語化させることが可能であると考える。

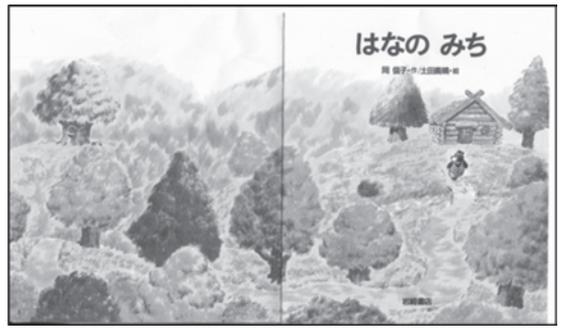


図3 見開き①

図4（見開き②）では、絵が「くまさんが、ふくろをみつけました。」という文と結びついている。袋を拾う姿と橋はクローズアップされている。他に文は書かれていないが、この場所が森の中のどの位置に当たるかは、見開き①を見ることで理解させることができる。前のページの絵と関連付けることで部分と全体を捉えさせることができる。見開き②からは飾りの枠がつけられている。絵本を連続した絵として見ていくと、ここから続く



図4 見開き②

見開きの枠があるページでは、全て白い袋が描かれている。ページをめくりながら枠の色と枠内の装飾が変化していくことに着目させることで、小さな袋の状態や登場人物がいる場所の変化に関心をもたせるとともに、文と関連付けながら登場人物の気持ちの変化を捉えさせることができると考える。



図5 見開き③



図6 見開き④

図5（見開き③）では、「おや、なにかな。いっぱいはいっている。」と書かれ、その文と絵を関連させながらくまさんの様子を読み取らせることができる。図6（見開き④）でくまさんは小さく描かれ、「くまさんが、ともだちのりすさんに、ききにきました。」という文が書かれている。ここでも、文が語っていないりすさんの家の位置が図3の絵によって理解できる。また、「くまさんはりすさんの所に聞きに行ったけれども自分だったらこうするのに。」と考えながら読ませることもできる。このような読み方をするすることで、自分と関連付けて感想をもつ力を育てることが可能である。



図7 見開き⑤



図8 見開き⑥

図7（見開き⑤）では「くまさんが、ふくろをあけました。」、図8（見開き⑥）では「なにもありません。」と書かれている。それぞれの文と絵とを結びつけながら読み、これらの絵と絵を比較することで人物の様子や気持ちの変化を読み取らせることができる。くまさんの体は裁ち切りの方により一部しか描かれていないこと、視点の位置が高く、くまさんの目の高さから描かれていることから、これまで表れていなかった袋の底の穴に注目させることができる。この絵は、児童に袋の中身はどこに行ったのかななどの疑問を持たせる働きが十分にある。左のページには、本文とともに落ち葉が2枚描かれている。この葉が余白にある理由をそれまでの流れを踏まえ考えさせることで中身と落ち葉の関係を捉えさせることもできる。このように、絵本には、文が語ることに絵から感じたり読み取ったりすることができるというよさがある。

見開き⑦（絵は省略）では、前のページの背景の色よりも明度が落ちている絵と「しまった。あながあいていた。」という文から、くまさんとりすさんの気持ちの変化を感じさせることができる。

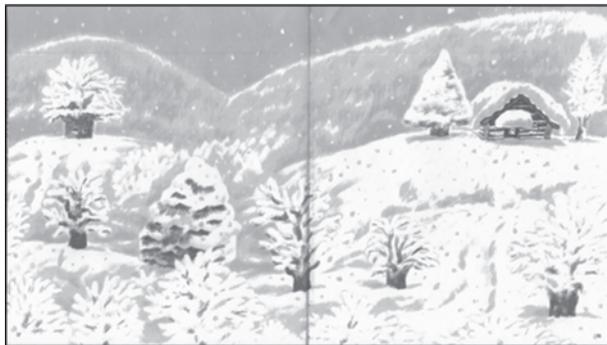


図9 見開き⑧



図10 見開き⑨

冬の季節に変化した図9（見開き⑧）では、図3（見開き①）と同様に枠はなくなり、雪景色が広がる。文は語っていないが、水色と白に着目させることで寒さや音の静けさなどを感じさせるとともに、動物たちの様子を想像させることができる。

図10（見開き⑨）では、「あたたかいかぜがふきはじめました。」という文の「あたたかい」に着目させ、絵の中にあたたかさを感じさせるものを見付けさせることで、春になった暖かい様子や部屋の明るさ、温かさを読み取らせることが可能である。春の訪れを感じさせる要素が入ったものは、太陽の光、くまさんのポーズ、余白の木の枝、部屋のオレンジ系の色である。また、部屋の温かさを感じさせる要素は、赤色のテーブルクロス、円形の窓、丸みのある暖炉、両側がくまの形になっているベッド、くまの形が描かれた壺である。

図11（見開き⑩）では、文は語っていないが、絵を見て木々の芽、草、花などから新たな命を感じ取らせることができる。秋の絵（図3）と比較させることで、まず、絵を正確に見て、変化に気付かせることができる。次に、花が咲いた理由、袋の中に入っていたものをそれまでのページと関連付けて考えさせることができる。つまり、前の場面の絵や文と関連付けながら場面の变化とその理由を解釈する力を育てることが可能であると考えられる。さらに、断ち

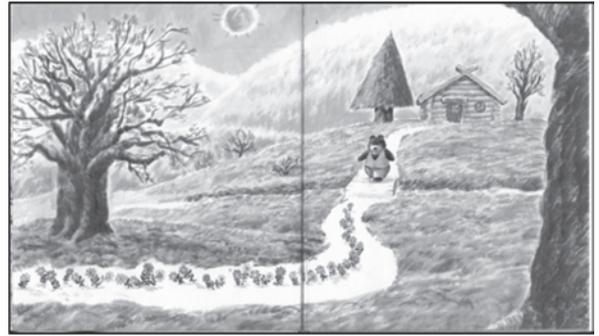


図11 見開き⑩

切りの要素に着目させることで、花がどこまで続くのかを予想させることもできる。この場面は、花が咲いたという大きな変化のある場面であることから、多くの児童が好きな場面として選ぶところだと考えられる。ここでも絵の中に根拠を見つけて、好きな理由を言語化させたい。雪景色の絵（図9）と比較させることにより、花が咲いたことに感動させるとともに種の命の強さを感じさせることも可能である。これは、感性、テーマを読み取る力の育成につながると考えられる。

図12（見開き⑪）は、高い所から見下ろした絵であり、花の道の全体が見えるようになっている。この道の絵と「ながいながい、はなのいっぽんみちができました。」の「はなのいっぽんみち」、「ながいながい」とを結び付けさせることができる。ここで初めて登場する3羽の小鳥にも注目させたい。藤本（2007）が絵本『リベックじいさんのなしの木』のカエルの登場について「画家はある意図をもって描いているのです。（中略）カエルは、読者に、梨の木へ注目させる働きをしているのです。このようにして、読者はカエルの視線を通して、梨の木を見るのです。」（p.24）と説明しているように、『はなのみち』では小鳥たちの視線を見させることで花の道への注目度が上がる。最後に、見開き⑤⑥⑦を再度見ながら、くまさんとりすさんの会話や続き話を自由に想像させることが可能である。それを通して二人の心がさらに結びつくことも読み取らせたい。



図12 見開き⑪

以上を踏まえて、読者はカエルの視線を通して、梨の木を見るのです。」（p.24）と説明しているように、『はなのみち』では小鳥たちの視線を見させることで花の道への注目度が上がる。最後に、見開き⑤⑥⑦を再度見ながら、くまさんとりすさんの会話や続き話を自由に想像させることが可能である。それを通して二人の心がさらに結びつくことも読み取らせたい。

7. 絵本を用いた読書指導の可能性

以上の教材研究を基に研究の目的①（絵本の絵を読むことの意義や絵を読むことで目指す力について考察する）、目的②（絵本の読み方の可能性について考察し、絵本の教材としての意義、教科間の関連を図った読書指導の可能性を示す）に沿って考察する。

7.1. 研究の目的①について

本研究では、絵本を芸術として絵の分析をする絵本研究と読書指導や国語教育との関連で考察している絵本研究を基に、絵本の絵を読むことの意義として、感想を広げ、論理的に話したり書いたりする力や豊かな想像力、解釈する力の育成を目指すことが可能であること、文章を読み、論理的に表現

する力へ発展する可能性があることを示すことができた。絵本の絵を読むことにおいては、国語科と図画工作科のそれぞれの目標をふまえ、教科間の関連を図りながら力を育成することができると考える。図画工作科では、色や形などに関わる感性や絵を鑑賞する力、国語科では、絵の中の要素を根拠として想像や解釈をしたり感想をもったりする力を目指す力として示した。

7.2. 研究の目的②について

藤本の絵本研究から抽出した絵の構成要素やページ構成を使って絵本『はなのみち』の教材研究をすることにより、文以上に絵が語ることを、絵だけで語ることを読むことができ、見過ごしがちな絵から読み取れるものを示すことができた。その結果、絵本『はなのみち』がもつ教材としての意義を以下のように考えた。

- ・表紙や裏表紙、見返し、扉により、本文に入るまでの情報を捉えることができる。
 - ・クローズアップされた絵を全体の景色が描かれた見開きと比較することで、部分と全体の関係が捉えられ、登場人物の位置と移動が正確に理解できる。
 - ・絵の要素を根拠にして、自然の大きさや美しさを感じ取らせることができる。優しい色使いの絵により感性や絵を鑑賞する力を育てることが可能である。
 - ・文と共に絵の中に根拠を見付け、好きな場面とその理由を話すことができ、感想が広がる。
 - ・文を基に絵の要素に着目すると、場面の様子や人物の気持ち等についての想像が広がる。
 - ・離れた絵と絵を比較することで場面の変化を見付けることができ、前の文や絵と関連付けることで変化の理由を解釈することができる。
 - ・前の絵と関連付けることで、大事なこと（命や友達の心の結びつき）を捉えることができる。
- 絵本『はなのみち』の全体を通して見たときには、次の意義が考えられる。
- ・袋の中身は絵で表されておらず、春になって突然花の道が描かれていることから、謎を解く楽しさがある本である。袋の中身と花の道ができた理由は、それまでの文と絵から考えられる。
 - ・この絵本は、枠のない見開きと飾りの枠で囲まれた見開きから構成されている。枠のない見開き同士を関連付けると、季節の移り変わりを捉えることができる。また、飾りの枠で囲まれた見開きを続けて見ていくと、文と登場人物の絵から気持ちの変化を読み取ることができる。
 - ・見開き8ページ分にはそれぞれ1文ずつ書かれている。その中の6ページの文は絵と直接対応しており、1年生の児童が文を正確に読むことができると考えられる。2ページ分は、文が語っていること以上に絵が語っている。そのページ数は多くないため、1年生は、絵の読み方の初めての学習に無理なく取り組むことができる。

奥泉・内海・岡田（2004）は、1学年の教科書の挿絵で必要とされている力として、前述のように、「絵からわかることを正確に読み解く力」、「絵をきっかけとして、自分の経験や知っていることを述べる力」を挙げているが、国語科と図画工作科の目標と関連させた読書指導を行うことにより、2年生以上で必要とされている力「絵を比較する力」、「絵から想像してお話等を作る力」、「複数の絵の関係を検討して、つなげて説明やお話を作る力」、「絵に込められた象徴性やメッセージ性などをことばにしてみる力」を指導することも可能になる。

以上のように、国語科と図画工作科との関連を図った絵本の指導には、感性や絵を鑑賞する力、情

報を捉える力、想像力、解釈力、感想をもつ力など、幅広い力を育てる可能性があると考える。

8. 課題と展望

本研究は絵本の教材研究の段階に留まるが、今後、文と共に絵に着目しながら目指す力を引き出すことのできる具体的な発問を吟味していく必要がある。その際、読み聞かせは楽しいものであるという前提で行っていく必要がある。決して指導者の教え込みにならないよう、児童が指導者の発問により自然に絵の要素に気付きながら絵と文、絵と絵を関連させて読む方法を習得できるようにしていかなければならない。本研究では、絵の読み方の初めての学習として読み聞かせを取り入れたが、その場合、全体での話し合いをすることになるため、一人一人の読み方を捉え、身に付いた力を評価することができにくいという課題がある。それは、児童にも自分の学びを実感させることができないということである。今後学級での読み聞かせで学んだことを活用して自分自身で絵本を読む活動、書く活動の在り方を検討し、児童の読みの把握ができる方法を示したい。このような活動を取り入れた授業を行う時期や用いる絵本については、国語科教科書で設定されている読書単元や「読むこと」の単元との関連を図りながら検討する必要がある。

現在、国語科教科書で設定されている読書単元においては、本を選んで読む活動や面白いところや好きなどころを紹介する活動が取り入れられているが、選書や本の紹介についての学び方は具体的に示されていない。本研究で示した読書指導は、今後これらの学び方を指導できるものとして取り入れることが可能である。さらに、同じ絵本作家の絵本を比べて読み、共通点を捉える指導や同じ動物が主人公の本を比べて読み、絵の描き方の違いとそれによる作品の雰囲気の違いを捉える指導を行うことで、これらの本を自分で読み広げ、楽しむことも可能となるであろう。今後は、図画工作科の関連のさせ方として、単元の導入に絵の描き方の異なる絵本同士を比べ、形や色に自然に目が向くように導き、終末では、着目してきた形や色に気を付けて続き話を予想して絵を描き、それを文章で紹介する活動を行う方法も考えられる。このような活動を取り入れることで、国語科としての読む力、図画工作科としての感性、鑑賞力とともに、作品世界を想像して絵で表現する力、自分の絵を文章で表現する力も高まることが期待される。

引用・参考文献

- 今井良朗（2014）『絵本とイラストレーション 見えることば、見えないことば』武蔵野美術大学出版局
- ヴィクター・ワトソン&モラグ・スタイルズ編 谷本誠剛 監訳（2002）『子どもはどのように絵本を読むのか』岡信子（1998）『はなのみち』岩崎書店
- 奥泉（岩本）香・内海紀子・岡田美也子（2004）「国語科における『絵を読み解く力』の育成—初等教育およびその教員養成課程を視座として—」『千葉敬愛短期大学紀要』第26号
- 甲斐睦朗 ほか（2018）『こくご一上かざぐるま』光村図書出版株式会社, pp.32-39
- 三森ゆりか（2002）『絵本で育てる情報分析力』一声社
- ジェーン・ドゥーナン著、正置友子・灰鳥かり・川端有子訳（2013）『絵本の絵を読む』玉川大学出版部
- 全国大学国語教育学会編（2013）『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書株式会社

- 谷本誠剛, 灰島かり (2006) 『絵本をひらく 現代絵本の研究』人文書院
- 西岡育子 (2017) 『幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉』チャイルド
本社
- 日本児童美術研究会 (2018) 『ずがこうさく1・2上』日本文教出版株式会社
- 日本造形教育研究会 (2018) 『ずがこうさく1・2上』開隆堂出版株式会社
- 藤本朝巳 (1999) 『絵本はいかに描かれるか (表現の秘密)』日本エディタースクール出版部
- 藤本朝巳 (2001) 『ぞうくんはどっちを向いている? 楽しい絵本学』フェリス女学院大学
- 藤本朝巳 (2007) 『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部
- 藤本朝巳 (2015) 『子どもと絵本 絵本のしくみと楽しみ方』人文書院
- 藤本朝巳, 生田美秋 (2018) 『絵を読み解く 絵本入門』ミネルヴァ書房
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説国語編』東洋館出版社, pp.69-75
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』 pp.126-127
- 余郷裕次 (2013) 『絵本のひみつ』徳島新聞社
- 米谷茂則 (2005) 『小学校児童の絵本読書指導論』高文堂出版社

Reading Picture Books in Elementary School: Defining Links Between the National Language Department and the Course of Drawing and Handicraft

Keiko HOSO

Senri Kinran University

Abstract

In the first grade of elementary school, it is necessary to provide guidance on how to read picture books from a new viewpoint, rather than simply reading stories from early childhood picture books. The purpose of this research is to consider the significance of reading the pictures of a picture book and the abilities required to read a picture book. By studying picture books as teaching materials, imbued with pictorial elements we need to pay attention to, we outline a way to read pictures with words to young students. In addition, it can be shown that this reading ability supports links between the Japanese language department and the drawing department.

Keywords : Picture Book Study, Pictures, Sentences, Story Telling, Story Element